

被災者の祈りをこめてバルーン・リリース

仮設に笑顔を届けようプロジェクト



震災が起こった午後2時46分、祈りをこめてバルーン・リリース (多賀城市 多賀城公園仮設住宅にて)

9月3日、“仮設に笑顔を届けようプロジェクト”の企画が多賀城市の多賀城公園仮設住宅で開催され、坂総合病院、みやぎ保健企画、泉病院、青年JBなどから民医連職員約30名が参加しました。

このプロジェクトは“縁日”という誰でも楽しめる企画を通して、仮設住宅に住む人たちの交流の橋渡しとなるように、併せて、炊き出しや健康相談会などを行っているもので、山王仮設住宅(7/29)に続いて2回目の開催になります。

今回は、162世帯325人が住む仮設住宅で、昼食の提供、健康相談会、水風船やスーパーボール掬い、震災のあった午後2時46分にあわせてバルーン・リリースなどを行いました。プロジェクトの佐藤美希医師(坂総合病院)は、

「仮設に住んでいる人たちが本当に楽しみにしてくれていて、たくさん来ていただきました。坂病院だけでなく、地域の人も協力して下さい、とても感謝しています。風船には被災された方たちが自分自身で“早く元気になります”などと真摯なメッセージがたくさん書かれていて、その風船が大空に舞い上がっていったのがとても感動的でした。」と話してくれました。

坂病院の人ね 頑張っね!

坂総合病院入職2年目の今野琢也さん(作業療法士)は、被災された人たちのマッサージを行っていました。「重い物を持っている人もいて筋肉が硬い人が多いと感じました。午前中にチラシ配布をしていて『坂病院の人ね 頑張っね!』と声をかけて頂いたのがとても嬉しかった。また、初めてのボランティア参加で、自分でも何かできないかと思っていたので、マッサージした人に喜んで頂き、役に立てて良かったです」と話していました。

今野さんは、利用者さんを助けるために亡くなられた“なるせの郷”所長土井芳子さんの甥で、民医連の医療などについて少しは知っていましたが、被災者の手助けになるように多くの職員が頑張っていて、民医連の職員でよかったと話してくれました。



マッサージのあと相談を受ける今野琢也さん

多賀城市桜木で被災した60代の男性は、脳梗塞で月1回病院を受診していますが、仮設には高齢者が多いので、マッサージはとても嬉しいです。85歳で、要介護1の母親をみていますが、最近、認知症の症状もできて不安ですとも。

スーパーボールすくい楽しいな

内海大和くん(9歳)は、家で宿題をしていたときに震災に遭いました。お母さんが家にいましたがとても怖かったと。今日はお祭りみたいで、水風船やスーパーボールがたくさんとれたので、とても楽しいですと話していました。



今度はピンク色のボールをすくうぞ